

一般社団法人日本生態学会

No.62

2024年1月

# ニュースレター

第21回 男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して ..... 1

## 記事

I. 次々期会長および次期代議員選挙結果 ..... 4

II. 学会各賞受賞者決定 ..... 4

III. 書評依頼図書 ..... 4

IV. 寄贈図書 ..... 5

V. 地区会報告 ..... 5

書評 ..... 13

京都大学生態学研究センターニュース ..... 17

## 第21回 男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して

シンポジウムテーマ  
フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン  
～誰もが能力を発揮し輝くために～

キャリア支援専門委員会  
河内香織・木村恵・高野宏平・高田まゆら・鈴木牧

2023年10月14日(土)、第21回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム「フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン～誰もが能力を発揮し輝くために～」が東京大学弥生講堂一条ホールにて、また、オンライン(Zoom Webinar)にて開催された。日本生態学会は正式加盟学会として2007年度から本シンポジウムに毎年参加している。日本生態学会からは男女共同参画理事の木村、キャリア支援担当理事の鈴木(牧)、およびキャリア支援専門委員会から高田、高野、河内が、一般会員から4名が参加した。2016年度から、一般会員に対して本シンポジウムの参加費と交通費を支援しているが、今年度の一般参加者はオンラインで参加のため支援は行われなかった。また、今回は日本生態学会が企画者であるため、企画運営として男女共同参画学協会連絡会幹事学会運営TFメンバー9名と宮下会長、シンポジウム登壇者として北島副会長も参加した。

午前の部(10時～11時半)は「男女共同参画のさらなる推進に向けて～加盟学会の好事例共有～」というタイトルで開催された。開会に先立ち第21期運営委員会委員長を務める半場祐子氏が挨拶した。今井桂子氏(一般社団法人日本応用数理学会)より趣旨説明・加盟学協会のアンケートの結果紹介が行われ、各学協会が試行錯誤している活動について紹介した。次に、加盟学協会の取組紹介として3題の講演が行われた。講演1では、成川礼氏(公益社団法人日本植物学会ダイバーシティ推進委員会委員長)より、「日本植物学会のダイバーシティ推進への試み」として、ジェンダーだけでなく様々な属性の方々活躍できる環境を実現すべく行われている活動について紹介された。講演2では飯島玲子氏(公益社団法人日本技術士会男女共同参画推進委員会委員長)から「日本技術士会の女性向け「技術サロン」紹介」というタイトルで、長年行われてきた情報共有の場である「技術サロン」の活動について講演された。講演3では志牟田美佐氏(一般社団法人日本生理学会男女共同参画推進委員会委員)より、「誰もが輝ける環境を目指して、～日本生理学会の試み～」というタイトルで、日本生理学会における「生理学女性研究者の会(WPJ)の事例や委員会の活動を紹介していただいた。

11時半からのポスターセッションでは日本生態学会のポスター発表も行い、これまでの男女共同参画に関する活動を紹介した。

午後の部(13時～16時半)は、「フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン～誰もが能力を発揮し輝くために～」というタイトルで開催された。

開会に先立ち、幹事学会挨拶として日本生態学会の宮下直会長が挨拶した。本シンポジウムに150名程度の参加があることが紹介され、簡単に日本生態学会の紹介が行われた。また、今回の幹事学会としての対応として、WGを公募し、10名程度の応募があり、フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョンに内容が決まるまで検討を重ねてきたことが紹介された。生物多様性が人間に与える恩恵については証明されつつあり、それは人間界においても同様であろう。活発な議論を期待したい。という言葉で挨拶が締めくくられた。

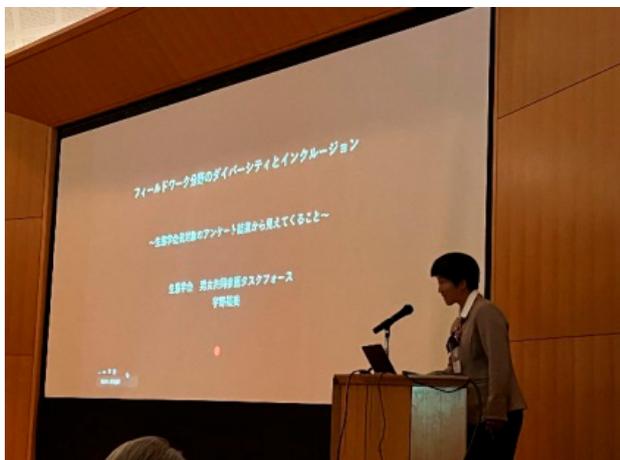
次に、林香里氏(東京大学理事・副学長)から歓迎の挨拶があった。女性の活躍と支援について多大な貢献をされた大坪久子先生のメモリアルブースについての言及があり、学協会連絡会のHPから「アンコンシャスバイアスについて知っていますか」、をダウンロードすることができること等が紹介された(無意識のバイアスコナー-男女共同参画学協会連絡会(djrenrakukai.org))。また、理事就任以降の東京大学の取り組みについて紹介された(Dインクルージョン、令和4年の女性リーダー育成型の事業採択、科学技術人材育成事業等)。事業の全体像や行動改革についても紹介があった。最後に、本シンポジウムが学術界をはじめ日本社会の男女平等につながるよう祈念するとの言葉で締めくくられた。

来賓の岡田恵子氏(内閣府男女共同参画局局长)からは、日本の研究者の中の女性比率が低く、OECD諸国のなかでとくに工学系は少ないことが紹介された。その中で、フィールドワークについてフォーカスすることは意義があると述べられた。内閣府においてリコチャレ(理工チャレンジ(リコチャレ)|内閣府男女共同参画局(gender.go.jp))開催等様々な取り組みをしていきたいと述べられた。

同じく来賓の山下恭徳氏(文部科学省科学技術・学術政策局、科学技術・学術総括官)からは文部科学省を代表して挨拶があった。自然科学分野の女性研究者の割合が17.8%と低いことが紹介された。平成27年以降、ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ:文部科学省(mext.go.jp))等の環境整備に取り組む大学への支援制度が紹介された。

続いて生態学会員でもある宇野裕美氏(北海道大学大学院地球環境科学研究院、学振特別研究員)からシンポジウムの趣旨説明と日本生態学会の会員を対象としたアンケート結果の解説が行われた。フィールドワーク(FW)を主体とする宇野氏からは、ご自身のFWの紹介を講演

いただくとともに、FWの困りごとについてアンケート結果が説明された。アンケート項目には月経の問題、身体的困難さ、セクハラ、性的役割分担の強要の見聞き、性別や文化宗教的背景を理由にFWの参加を躊躇した経験等、多岐にわたり、これらについて解説された。ライフプランとキャリアの両立に関する項目、子供の存在と研究に関する項目では、女性に負担がかかりがちなのが示されていたが若い男性も子供の存在が研究のやりづらさに繋がっていると回答していた。ダイバーシティの価値と難しさについてのアンケート結果についても解説され、性別、人種、文化が多様なことにより困難な面（気を遣う、言葉の壁）も生じるが、多様なほど研究室が良く回ることで、女性の方が優秀なケースがあること、多様な文化を通して刺激のあることも多いのではないかと述べられていた。参加者である我々自身の経験からも、アンケート結果は非常に納得するものであり、また若い男性研究者も苦労しているということについては、時代の変遷に伴う同性間の意識の差をすり合わせて行くことの難しさを感じた。宇野氏によるアンケート結果の報告については、2024年3月16日から21日に横浜で開催される生態学会でも詳しく解説があるので、興味を持たれた方はぜひ参加されたい。



次に、3題の講演が行われた。まず、瀧上舞氏（国立科学博物館研究員）から「アンデス文明研究の多様性」というタイトルで講演があった。瀧上氏は古人骨の化学分析が専門で、文字を持たない文明の背景を科学分析で解き明かす研究概要を魅力的に紹介していた。調査フィールドがアンデス地方ということで、家族の協力を得ながら、育児と長期のフィールドワークの両立を想定した生活スタイルを模索されていた。海外の研究コミュニティに比べ、変わりつつも未だ参加者が男性に偏っている国内のコミュニティの状況について言及しており、研究を継続することの重要性と、多様なメンバーが参加することで、それぞれ無理をせず相談しやすいチーム体制作りにつながっているのではないかと話されていた。

2 題目に、猪上淳氏（国立極地研究所准教授）が「激変する極域：多様なアプローチの必要性」というタイトルで講演された。全球平均よりも速いペースで温暖化が進行する極域では、天候や生態系、そして人間の生活に

まで影響が出ている。猪上氏はアクセスのむずかしい極地をフィールドとし、これまで北極海の海水減少が雲生成にどのような影響を及ぼすかなどについて研究されてきた。閉ざされた環境で長期間過ごすことになる地域観測隊で取られているハラスメント対策の事例や、共働き世帯における自身の育児や子育て経験、子育てと仕事との両立についての考えを紹介した。観測現場で得られるインスピレーションは研究の原動力となっていること、またフィールドワークには十分な準備や不測の事態への対応が必要となるが、これらは家庭や育児にも共通することであること、また多様な研究者との交流が自身の研究を深めるうえで役立っていることをまとめとして講演が終わった。



3 題目に、北島薫氏（京都大学農学研究科・副研究科長、日本生態学会・副会長（来年度会長））が「米国における女性科学者の半世紀」というタイトルで講演された。北島氏は、アメリカで29年間の活動を経て京都大学教授になった経歴を持つ。専門は熱帯生態学で、1985年の大学院生時代にパナマのパロコロラド島で研究を始めた。講演では、（特にフィールド研究における）女性研究者の歴史やその社会的変遷、現状と課題を紹介した。その上で、「遠慮をしない（自己引用する）」「みんなで尖ろう（女性研究者が少ない悪循環を断ち切るために絶対数を増やす）」「疲れてやめてしまわない（研究ギャップは悪いことではないとデータで証明されている）」「シニアは、自分たちの先入観を若い人に当てはめようとしない」の4点を指摘した。

講演後はパネルディスカッションが行われた。講演を行った宇野裕美氏、北島薫氏、猪上淳氏、瀧上舞氏の計4名がパネリストを、三宅恵子氏（名古屋大学特任講師）がファシリテーターを務めた。

まず、宇野氏の講演によって整理されたフィールドワーク分野での課題の対策が話し合われた。ハラスメントの対策として、フィールドワーク前の事前説明会や相談員の配置、部屋割りの工夫等の実践、大学や学協会としてハラスメント禁止の断固とした態度表明を行う必要性、メンバー構成の男女比やハラスメントを嫌う雰囲気形成など様々なレベルでの予防策が紹介された。また、30代前後の女性がキャリア形成の過渡期における家庭

との両立で陥るジレンマについて取り上げられた。各パネリストの実体験に基づき、育児中の海外調査の実施の困難や、共同研究者への影響などリアルな苦労が共有される一方、過大なストレスから自身の心を守るようアドバイスもあった。重要な指摘として、日本の育休・産休制度が任期無し雇用者向けに設計されている点や、育休中に科研費の使用が一切認められず研究の継続性が絶たれるといった制度上の問題もコメントされた。育休制度に関しては、男性として育休を取得された猪上氏の貴重な体験談を共有して頂いた。次に、子育て期のフィールドワークについて、講演者それぞれの状況に応じた工夫が紹介された。共通して挙げられていたのは支援者の確保で、自分や配偶者の親からの支援、あるいは同僚や近所の人など頼れる他人のネットワークを構築する必要性が繰り返し強調されていた。この話題についてはフロアから悩みの相談も寄せられ、各パネリストから体験を踏まえたアドバイスがなされていた。子育てに関連して、研究者の夫婦同居支援が浸透しない状況についても話し合われた。この問題ではやはり日本の大学等の人事制度の構造的な欠点が大きいが、従来制度の中で何らかの先例を作ってみせることや、複数部局で協力してポストを出す等のアイデアの提案もなされた。以上の話題の他に、各講演者が必要と思う支援策として、オンライン環境の構築、学会参加費の補助、休業代替要員のキャリア形成に十分な雇用期間の設定、などがあげられていた。その一方で、社会や所属組織へ一方的に支援を求めるのではなく、研究者自身が研究費の取得等で努力するべき、またある程度妥協も必要だといった周囲への配慮を意識したコメントもあった。

全体を通じて、今回のシンポジウムはフィールドワーカーの生活に即した話題が多く取り上げられた事もあり、終始温かい雰囲気であった。制度上の問題や是正策



の話し合いでも生態学会らしいバイタリティが表れていたと思う。これを象徴するように、パネリストの北島次期会長から若手への「制度の構築と妥協という、相反する要素を両方行っていくことが必要」、「心が健全なことが一番大事、完璧を目指して自分を追い詰めずに、研究を楽しみと思う気持ちを忘れないでほしい」という温かいエールでシンポジウムが締めくくられた。

終わりに、第21期活動報告が行われた。また、提言・要望書WGおよび女子中高生理系進路選択支援WGからの活動報告がなされた。女子中高生理系選択支援WGでは夏の学校が4年ぶりに対面開催されたこと等が報告された。最後に来年度(第22期)の幹事学会である一般社団法人日本応用数理学会からの挨拶で締めくくられた。今回の講演の詳細については資料集(21st\_symp\_shiryoshu\_231015.pdf(djrenrakukai.org))および今後学協会連絡会HPに掲載される報告書を参考にされたい。

## 記 事

### I. 次々期会長候補及び次期代議員選挙結果

日本生態学会選挙管理委員会  
委員長 徳地 直子

2023年10月31日に投票を締め切り、11月2日に京都大学において開票を行った結果、次々期会長候補および次期代議員は下記のように決定いたしました。

総投票数 419 票 (投票率 10.92%)。

#### 1. 会長候補 (任期 2026年3月～2028年3月)

	氏 名	得票数
選出	日浦 勉	108
次点	中野 伸一	85
	辻 和希	66
	吉田 丈人	62
	近藤 倫生	52
	その他 34 名 (合計)	40
	白票	6

#### 2. 代議員 (任期：2023年12月～2025年12月)

1) 全国選出の代議員 (15名)：同得票数の場合は年少者を優先します。次点者、次々点者までを示しました。

	順位	氏 名	所属地区会	得票数
	1	佐竹 暁子	九州	72
	2	相場 慎一郎	北海道	57
	3	石川 麻乃	関東	50
	4	森 章	関東	47
	5	内海 俊介	北海道	41
	6	工藤 岳	北海道	38
	7	小野田 雄介	近畿	37
選出	8	東樹 宏和	近畿	33
	9	赤坂 宗光	関東	32
	10	大澤 剛士	関東	29
	11	土居 秀幸	近畿	28
	12	西廣 淳	関東	27
	13	角谷 拓	関東	26
	14	佐藤 拓哉	近畿	25
	15	石濱 史子	関東	24
次点	15	塩尻 かおり	近畿	24
次々点	17	瀧本 岳	関東	22

2) 地区選出の代議員 (7名)：選出・次点ともに、全国選出でも選出された場合は全国選出を優先し、同得票数の場合は年少者を優先します (\*)。 ( ) 内は得票数で、次点者および、同得票数獲得者まで示しました。

北海道	選出：小林 真 (9) (全国) 相場 慎一郎 (8) 次点：先崎 理之 (5) * 岸田 治 (5) * 揚妻 直樹 (5) *
東北	選出：占部 城太郎 (8) 次点：富松 裕 (6)
関東	(全国) 赤坂 宗光 (14) (全国) 森 章 (13) 選出：飯島 勇人 (12) 次点：竹内 やよい (11) * (全国) 石濱 史子 (11) *
中部	選出：安藤 正規 (5) * 次点：井田 秀行 (5) *
近畿	選出：丑丸 敦史 (11) 次点：井鷲 裕司 (7)
中国・四国	選出：鈴木 紀之 (4) * 次点：三村 真紀子 (4) * 兵藤 不二夫 (4) * 永松 大 (4) * 宮竹 貴久 (4) *
九州	(全国) 佐竹 暁子 (10) 選出：竹垣 毅 (6) * 次点：立田 晴記 (6) *

### II. 学会各賞受賞者決定

- 第22回日本生態学会賞  
工藤 洋 (京大学生態学研究センター)
- 第28回日本生態学会宮地賞  
デイヴィッド・アマテージ (沖縄科学技術大学院大学)
- 安藤 温子 (国立環境研究所生物多様性領域)  
鈴木 健大 (理化学研究所バイオリソース研究センター)
- 第17回日本生態学会大島賞  
なし
- 第12回日本生態学会奨励賞 (鈴木賞)  
河合 清定 (国立研究開発法人国際農林水産業研究センター)
- 齊藤 匠 ((チェコ共和国) マサリク大学理学部)  
辻 冴月 (京都大学大学院情報学研究科)
- 第1回日本生態学会自然史研究振興賞  
末吉 昌宏 (国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所)
- 遠山 弘法 (桜美林大学リベラルアーツ学群)
- 第22回日本生態学会功労賞  
露崎 史朗 (北海道大学)  
中静 透 (森林総合研究所)

### III. 書評依頼図書 (2023年5月～2024年1月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@esj.ne.jp) まで

お知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 植生学会編・前迫ゆり責任編集「愛しの生態系 研究者とまもる『陸の豊かさ』」(2023) 240pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-7109-3
2. 水口博也著「世界アシカ・アザラシ観察記」(2023) 242pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063957-6
3. 梶光一著「ワイルドライフマネジメント」(2023) 272pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062233-2
4. 深澤遊著「枯木ワンダーランド 枯死木がつなぐ虫・菌・動物と森林生態系」(2023) 348pp. 築地書館 ISBN:978-4-8067-1653-2
5. 押田龍夫著「台湾動物記 知られざる哺乳類の世界」(2023) 164pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063380-2
6. 竹内望・植竹淳・幸島司郎著「雪と氷にすむ生きものたち 雪氷生態学への招待」(2023) 194pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-30822-6
7. マーリーン・ズック、リー・W・シモンズ著 沼田英治監訳 遠藤淳訳「なぜオスとメスは違うのか 性淘汰の科学」(2023) 192pp. 大修館書店 ISBN:978-4-469-26971-0
8. 森澤正昭編「東京大学三崎臨海実験所 その歴史と未来へ向けて」(2023) 216pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-066164-5
9. C.Starr・C.A.Evers・L.Starr 著 八杉貞雄監訳 佐藤賢一・澤進一郎・鈴木準一郎・浜千尋・藤田敏彦共訳「スター生物学 第6版」(2023) 368pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-2055-6
10. A.Houtman・M.Scudellari・C.Malone 著 岡良隆・岡敦子訳「教養の生物学 第2版」(2023) 304pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-2045-7
11. 久世松菴著 東繁彦訳注・解説「全訳 家蜂畜養記 古典に学ぶニホンミツバチ養蜂」(2023) 280pp. 農文協 ISBN:978-4-540-23144-5

#### IV. 寄贈図書

1. 「第47回 2022年度年報」(2023) 471pp. 公益財団法人鹿島学術振興財団

#### V. 地区会報告

##### 北海道地区会

2022年度地区会報告(2022年4月1日～2023年3月31日)

##### (1) 2022年北海道地区大会・総会の実施

日時: 2022年12月10日(土) 9:00～15:00

場所: Zoomによるオンライン開催

参加者: 60名(事前登録者+発表者)

概要: 口頭講演10件(若手の部が9件、一般の部が1件)。ポスター講演はなし。

「若手の部」発表者の中から毎回数名に若手研究奨励賞が贈られている。

5名の審査員による判定の結果、本年度は、五十嵐公一氏(北大・水産)に若手研究奨励賞(賞状および副賞)を授与した。

#### 講演者及び演題

##### [口頭講演]

「北海道石狩川流域における流域土地利用と河川水質との関連。」佐々木章晴(北大・農学研究院)

「Phenological matching of *Corydalis ambigua* and bumblebee emergence.」廖海翔(北大・環境科学)

「広域要因がキタナキウサギの存続に与える影響—生息地の再訪による検証—。」崎山智樹(北大・環境科学)・Jorge GARCIA MOLINOS(北大・北極域研究センター)

「海浜植物群落におけるハナバチ相の季節動態。」肖淑祺(北大・環境科学)・工藤岳(北大・地球環境)

「高山植物ウスユキトウヒレンの繁殖特性と種子食害パターン。」鈴木暁音(北大・環境科学)・工藤岳(北大・地球環境)

「イソヘラムシは不動行動で魚類捕食者からの捕食を回避する。」五十嵐公一・和田哲(北大・水産)

「海産巻貝オウウヨウラク *Ocenebrellus inornatus* の摂餌生態。」春成幹基・富吉啓恵・和田哲(北大・院・水産)

「サクラマス残留型は繁殖後に生息場所を変えるのか?」森山泉梨・二村凌(北大・環境科学)・森田健太郎(東大・大気海洋研究所)・照井慧(ノースカロライナ大学)・奥田篤志・内田次郎(北大・FSC)・菅野陽一郎(コロラド州立大学)・岸田治(北大・FSC)

「沖縄県に生息する亜種リュウキュウオオコノハズクの繁殖戦略。」江指万里・熊谷隼(北大・理院)・宮城国太郎(沖縄野鳥の会)・外山雅大(根室市歴史と自然の博物館)・高木昌興(北大・理院)

「リュウキュウコノハズクの交尾頻度はオスの年齢ではなくペア歴に左右される。」金杉尚紀(北大・理院)・澤田明(国環研)・中村晴歌・佐々木瑠太・高木昌興(北大・理院)

##### (2) 勉強会の開催

日時: 2022年12月9日(金) 13:00～16:00

場所: 北海道大学大学院地球環境科学研究院 D201 講義室(札幌市北区北10条西5丁目) + ZOOM オンライン

生態学モデリング勉強会(日本生態学会北海道地区会後援)

照井慧氏(ノースカロライナ大学)「数理モデリングを通じて生物群集を表現する」

13:00～14:45 講演第1部(研究について)(講演+質疑)

14:55～16:00 講演第2部(キャリアについて)

参加者40名(オンサイト22名、オンライン18名)

##### (3) 役員会

2022年8～10月(メール審議)

大会・総会及び勉強会の開催時期・内容について審議した。

## 東北地区会

### (1) 東北地区会第 68 回大会を開催

日程 2023 年 11 月 11 日 (土) ~ 12 日 (日)

会場 福島大学 <https://www.fukushima-u.ac.jp/access/>  
(福島市金谷川 1)

大会ウェブサイト <https://sites.google.com/view/esj-tohoku68>

公開シンポジウム「シカが増えて起きていること — 先進地域の事例と福島の現状について—」

福島慶太郎 (福島大・食農学類)「シカによる森林下層植生の過剰採食が渓流水質に与える影響」

生島詩織 (国立環境研究所 福島地域協働研究拠点)「シカの間を伝播する薬剤耐性菌：その広がり方と人の健康への影響」

千本木洋介 (株式会社 BOULDER)「シカが増えてどうなった？ 南会津の『今』」

今野万里子 (特定非営利活動法人おーでらす)「多様な『私』の視点でシカ問題を考える」

### 特別講演

キャス ジェイミイ (東北大院・生命)「Predicting the future of biodiversity and ecosystem services with species distribution models (種の分布モデルで生態系サービスと生物多様性の将来を予測する)」

### 一般講演 (口頭発表)

斎藤涼我 (福島大学)「北関東から南東北において分布拡大中のニホンジカ個体群の遺伝的組成」

坂詰七美 (山形大学)「塞がらないギャップは何を語るか — チシマザサが密生するブナ林のギャップ動態—」

渡会直輝 (福島大学)「宮城県東松島市洲崎湿地で確認された東北地方再発見のシラタマモ (車軸藻綱シヤジクモ科) と水質」

安田晶南 (弘前大学)「クロサンショウウオの卵嚢はなぜ乳白色に進化したのか？ — 捕食圧が駆動する卵嚢の硬さの進化—」

鈴木しゅん (山形大学)「カメノコハムシ種間にみられる寄主特異性の分岐と行動的隔離」

村田桃香 (山形大学)「フキバッタ類における交尾姿勢の左右性の検討」

佐々木あゆ (岩手医科大学)「岩手県高松の池から採集された *Eucyclops roseus* Ishida, 1997 (カイアシ綱, キクロプス目, キクロプス科) とその種内変異：形態およびミトコンドリア DNA の解析による検討」

鈴木碩通 (東北大学)「淡水性ケンミジンコ類 *Thermocyclops taihokuensis* の餌探索機構」

山口大輔 (福島大学)「帰還困難区域の陸域および水域生態系における <sup>137</sup>Cs 濃度分布と季節性」

松政正俊 (岩手医科大学)「東日本大震災後に再建された高田松原海岸・古川沼における半陸棲カニ類の生息状況」

占部城太郎 (東北大学)「マリモの過去 150 年をミジンコで復元する」

### (2) 地区委員会報告

2023 年度定例地区委員会は、2023 年 11 月 11 日に福島大学で開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は次の 10 名であった。兼子伸吾 (地区委員長)・石田清・鈴木まほろ・松政正俊・占部城太郎・陶山佳久・富松裕・藤山直之・福島慶太郎 (会計幹事)・黒沢高秀 (庶務幹事)

#### <報告事項>

##### ・庶務報告

黒沢庶務幹事より、2023 年度 11 月までの活動状況と会員動向について報告があった。

1) 2023 年 1 月 13 日：日本生態学会東北地区会報 83 号を発行・メール告知 (地区会事務局)

2) 2023 年 6 月 15 日, 10 月 10, 25, 27 日：第 68 回地区大会の案内をメール配信 (東北地区会準備委員会)

3) 2022 年 11 月 6 日：第 68 回地区大会の案内 (要旨集ほか) をメール配信 (東北地区会準備委員会)

4) 2023 年 11 月 11–12 日：第 68 回地区大会 (福島県担当) 定例地区委員会、招待講演、一般講演、地区大会総会

##### ・会計報告

福島会計幹事より、2022 年度決算と会計監査について報告があった。

##### ・岩手生態学ネットワーク活動および会計報告

鈴木委員より、2023 年 2 月 19 日に市民講座を実施したこと、2014 年 2 月に市民講座を予定していること、それらに関する会場使用料やちらし作成等の支出 (見込みを含む) について中間報告があった。

#### <審議事項>

##### ・次回、次々回地区大会開催地

次回大会 (2024 年) を青森県で開催することが、昨年度地区委員会の決定事項に基づいて了承された。さらに、次々回大会 (2025 年) は、「東北地区会運営の手引き」の「別表 1 東北地区開催地一覧」に従い、事前に岩手県へ依頼していることが報告され、内諾を得たうえで、承諾された (地区大会総会で追認)。

##### ・選挙管理委員の推薦

2024 年 7 月 31 日に任期が満了する現地区委員の改選選挙に関し、選挙管理委員として、牧野渡氏 (東北大) と藤山直之氏 (山形大) が推薦され、承諾された (地区大会総会で追認)。

##### ・自然保護専門委員の推薦

2024 年 3 月 31 日に任期が満了する自然保護専門委員 (東北地区委員) について、現在 2 名とも植物が専門であるため、鳥類が専門の方に打診中と言うことが報告された。推薦する人の選定について、地区会幹事に一任することが承諾された (地区大会総会で追認)。(追記：後に黒沢高秀氏 (福島大、再任) と高橋雅雄氏 (岩手県立博物館、新任) が選定され推薦された)

##### ・2023 年度予算執行状況および 2024 年度予算案

福島会計幹事より、2023 年度予算執行状況について説明がなされ、承認された。

次いで、2024 年度予算案について説明がなされ、「岩

手生態学ネットワーク支援費」50,000円を引き続き計上するなどの案が示された。次年度繰越金が多いことから、講師料50,000円を追加して地区大会・講演会の小計を250,000円にする案が出され、承認された(予算執行状況および予算案のいずれも、地区大会総会にて追認)。

- ・次年度岩手生態学ネットワーク活動計画  
鈴木委員より、2024年2月に予定された市民講座などに関する予算案が示され、承認された(地区大会総会で追認)。

<その他>

- ・次年度地区大会について  
青森県委員より次年度の地区大会について説明された。
- ・地区会報への大会発表要旨掲載について  
黒沢庶務幹事よりこれまでの経過や他の地区会の会報の状況について説明があり、地区会報に関して、シンポジウム等特別な講演で、オーガナイザーの希望があった場合のみ要旨を掲載する提案があった。審議の末、これまで通り地区会報に要旨を掲載し、大会案内等で要旨を地区会報に掲載する旨明記することとなった。
- ・総会議長について  
大会準備委員長が行うこととなった。

#### (3) 地区大会総会報告

2023年度東北地区会総会は、2023年11月12日に福島大学で開催された。議長に黒沢高秀氏(福島大)を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。

- ・地区委員会における庶務報告および会計報告が了承された。
- ・岩手生態学ネットワークの活動および会計について報告がなされた。
- ・地区大会開催地について審議が行われ、次回地区大会を青森県で行うこと、次次回大会は岩手県にすることが承認された。
- ・2023年度予算執行状況および2024年度予算案が原案どおり承認された。
- ・次年度の岩手生態学ネットワークの活動計画とそれに対する支援が原案どおり承認された。

#### (4) 発表賞の表彰

本地区大会一般講演について、参加一般会員の審査により地区大会発表賞2名を選出し、表彰した。

鈴木碩通(東北大・院・生命科学)、安田晶南(弘前大・農学生命・生物)

## 関東地区会

### 2023年(1月～12月)活動報告

#### (1) 地区委員会・地区総会報告

2023年3月3日に地区委員会および地区総会報告を、オンライン(zoom)で実施した。2022年度の活動報告および決算報告がなされ、2023年度予算案が審議され、承認された。

- (2) 2023年2月19日に第43回関東地区会生態学関係修士論文発表会をハイブリッド(対面:大気海洋研究所、オンラインzoom)で開催した。また、併せて東京大学の青木かがり助教による特別講演「クジラを追ってどこまでも?:動物目線と根性で探る鯨類の行動生態」が行われた。修士論文発表は以下の通りであった。

#### 【全て口頭発表】

山根理貴(東京農業大学)「福島第一原発事故による長期間の避難指示の指定が中大型哺乳類の生息状況に与える影響」

平野日向(茨城大学)「高山性ベンケイソウ科植物のフラボノイド特性」

平山楽(神戸大学)「再生草地において植物多様性回復を遅らせる要因～送粉ネットワーク再生に着目して～」

依田剛明(筑波大学)「コオイムシの捕食回避戦略～オスによる子育て進化の視点から～」

鶴亀里咲(お茶の水女子大学)「褐藻コンブ目雌性配偶体保存株の卵形成における至適光環境条件」

橋爪達郎(横浜国立大学)「琵琶湖で優占する大型植物プランクトンの鉛直分布とツボカビとの関係」

河野恵美(東京都立大学)「糸状性滑走細菌との種間相互作用によって引き起こされる*Thermosynechococcus*属単細胞性シアノバクテリアの細胞凝集形成」

前田達彦(東京大学)「ウナギ属魚類の生息地固執性および回帰性に関する行動生態学的研究」

竹内宏太(東京大学)「養殖ニホンウナギの河川放流後の生残・成長・移動」

田辺良平(東海大学)「ヒメイカの精子配分戦略の検証:雄の貯蔵精子量や雌の精子排除は配分を制限するのか?」

- (3) 2023年5月21日にオンライン(zoom)にて、下記の日本生態学会関東地区会公開シンポジウムを開催した。

タイトル:「若手で語ろう!生態学 第4回「はじまりの生態学」」

企画者:野口奨悟(九州大学)、上野尚久(千葉大学)、永濱藍(国立科学博物館)、原直誉(京都大学)、夫婦石千尋(九州大学)、富本創(九州大学)、大崎壮巳(広島大学)、高屋浩介(京都大学)、植村洋亮(北海道大学)

概要:【開催趣旨】どうすれば研究テーマが見つかるのか。これは、研究をはじめたばかりの学部生や大学院生、若手研究者の多くが最初に抱える大きな疑問であり、新しい研究テーマを見つけたい気鋭の研究者にとっても同様であろう。しかし、この疑問に模範解答は存在せず、「研究のはじまり」は人それぞれである。例えば、ある生き物への愛や探求心がきっかけで研究がはじまる人もいれば、「生物間相互作用」や「生物多様性」といった現象や概念への興味から研究がはじまる人もいよう。今回のシンポジウムの第1部では、幅広い分野の若手研究者

をお招きし、ご自身の研究内容を紹介していただくとともに、その研究のルーツについて語っていただく。講演後に実施するパネルディスカッションでは、「どうすれば研究テーマが見つかるのか」という疑問について講演者を中心に、聴衆も交えて議論を行う。パネルディスカッション後の第2部では、参加者を小グループに分け、参加者間で研究紹介やそれに関連する質疑応答を行うことで、若手研究者間の交流の機会を設ける。本シンポジウムは、「気持ち若手」であれば実年齢は問わず、どなたにでも参加していただきたい。「若手で語ろう！生態学」シリーズ第4弾となる本企画が、さまざまな立場で活躍する研究者間の交流および研究テーマ創出のきっかけを与える機会となり、ひいては生態学分野の今後の発展に繋がることを期待する。

#### 【プログラム】

企画趣旨説明 野口奨悟（九州大学）

第1部演題一覧：

野口奨悟（九州大学一貫制博士課程2年）「Giant Killing～大型な獲物をいかにして捕らえるか～」

大寺真奈（山形大学博士前期課程2年）「火山性温泉環境における地表性節足動物群集の多様性」

四ノ宮千遥（京都大学修士課程2年）「超大型多毛類オニイソメの分類・生態—多毛類学の『今』を考える」

開澤菜月（帯広畜産大学博士後期課程1年）「北の大地の多足類」

京極大助（兵庫県立人と自然の博物館研究員）「ミネルヴァのフクロウはいつ飛び立つのか」

藤岡春菜（岡山大学環境生命科学学域助教）「巣の門番は誰！？働きアリの勤務スケジュール」

中濱直之（兵庫県立大学自然・環境科学研究所講師）「標本が語る生物多様性の危機と保全」

パネルディスカッション 進行：永濱藍（国立科学博物館）、野口奨悟（九州大学）、コメンテーター：上野尚久（千葉大学）、植村洋亮（北海道大学）

第2部ショートトーク：進行：原直誉（京都大学）、夫婦石千尋（九州大学）

交流会

(4) 2023年10月21日に東京大学農学部弥生講堂アネックスおよびオンラインにて、下記の日本生態学会関東地区会公開シンポジウムを開催した。

タイトル：「生態経済学の挑戦—ハーマン・デイリーを超えて」

企画者：安田仁奈（東京大）、寺田 佐恵子（玉川大）、宮下直（東京大）

概要：【開催趣旨】近年、持続可能な社会を支える生態系への理解が深まり、生態系の貨幣価値化（見える化）を中心とした環境経済学的手法は生態学にも取り入れられている。だが、限られた資源と収支からなる地球システムにおいて、長期かつ大局的なシステム全体のバランスを考慮したグローバルな社会経済とはどうあるべきかという思想的背景が十分に顧みられないまま物事が急ピッチで進められている。

本シンポジウムでは、社会経済思想の専門家を招き、生態系や社会の持続的発展について独自見解を提示していただく。また、実践面での課題については、持続可能な農業や資源利用を社会の福利として位置づける研究や活動をしている方々から話題提供をいただく。総合討論では、これまで交流がほとんどなかった異分野間での意見交換を行い、新たな展望を語る。とくに、生態学と親和性が高い「定常経済学」を唱え、デイリーの3原則でも知られているハーマン・デイリーの主張を再考し、生態学者としてどのような視点や取り組みが必要かを探求していく。

#### 【プログラム】

生態学と思想史の出会いから持続可能性の核心に迫る企画趣旨説明 宮下直（東京大）

大森正之（明治大）「生態経済学と H. デイリーの持続可能性」

福永真弓（東京大）「飽和する世界のエコロジー：価値の政治と環境正義」

寺田佐恵子（玉川大）「野生生物の持続可能な利用：取引規制の効果と課題」

安田仁奈（東京大）「浅めの深海のサンゴ群集の保全を考える」

木村純平（パタゴニア日本支社）「リジェネラティブ・オーガニック（農業）の挑戦」

長谷川健司（東京外国語大）「サイボーグ・エコロジー：システム生態学と＜発展＞の審問」

総合討論 モデレーター：中山智香子（東京外国語大）

#### 中部地区会

令和5年度中部地区大会および総会の開催

開催日時：2023年9月26日（火）12:00～16:00

場所：筑波大学山岳科学センター八ヶ岳演習林

(1) 総会（12:00～13:00）出席者17名（オンラインとのハイブリッド）

#### 【報告事項】

・中部地区会事務局について

2022年度総会において2023年1月～2024年12月の中部地区会会長として松田陽介氏（三重大学）が選任され、事務局が三重大学に置かれることとなり、事務局構成員として会計・鳥丸猛氏、庶務・松尾奈緒子氏、監査・北上雄大氏が会長により指名されたことが報告された。

・中部地区会2023年度研究助成実績

2023年度の助成金事業に対して5件の応募があり、厳正なる審査の結果以下に示す3件を採択することとした。受賞者は2年以内の地区会での発表が義務付けられており、受賞者は2年以内の地区会での発表が義務付けられており、2023年度の地区会では2022年度採択者1名が口頭発表し、1名が報告書形式で発表することが報告された。

桂宗広（名古屋大・院・M1）「カザリショウジョウバエを用いた訪花性に寄与する神経/分子機構の解明」

熱方悠人（新潟大・院・M1）「夜間における花上捕食

者の存在が伊豆諸島におけるツリガネニンジンのポリネーターシフトを駆動する？」

渡邊彩音（名古屋大・院・M2）「種子散布がヤマモモの発芽・実生定着に及ぼす影響」

・会計報告

事務局会計担当より、2022年度の会計報告および2023年度の会計収支見込報告が行われた。

・その他

中部地区代議員：北村俊平氏（石川県立大学）2022年1月～

自然保護専門委員会中部地区委員：和田直也氏（富山大学）、増田理子氏（名古屋工業大学）2022年4月～（再任）

【審議事項】

・次年度の会計について

次年度も学生・大学院生に対する研究助成を継続する計画が承認された。

・次回の地区大会について

2024年度地区大会は、過去の実施県・大学を踏まえ、11月前後を目途に三重大学において実施することが承認された。

・その他

自然保護専門委員会中部地区委員について、次期委員の選出の依頼があった。

(2) 研究発表会（13:15～15:15）参加者20名

以下の7題の口頭発表が行われた。○印は発表者、★印は優秀発表賞の受賞演題。

○丸林菜々子（富山大・医学部）、八杉公基（福井県立大・海洋生物資源学部）、小田洋一（名古屋大・理学研究科）、竹内勇一（北海道大・理学研究院）「鱗食魚の表現型可塑性：鱗食経験に基づく捕食行動と下顎骨の変化」

★○小丸奏、伊藤健吾、中藤駿（岐阜大院・自然科学技術研究科）、田中智（京大院・農卒）「GPS通信機の追跡によるケリの繁殖行動の解明」

○堀中将大（富山大・持続可能社会創生学環）、和田直也（富山大・研究推進機構 GRASS）「Passive Acoustic Monitoringによる生物季節観測—セミの初鳴日が記録される過程と適切な録音環境の選択—」

○大西由花（三重大・生物資源学部）、北上雄大・松田陽介（三重大院・生物資源学研究科）「スギ人工林に生育するヒナノシャクジョウの発生分布と菌根の形態観察」

○Haque Md Ariful (GSSE, Univ. of Toyama), Naoya Wada (GRASS, Univ. of Toyama) 「Assessing the impacts of agricultural practices on soil health (A case study in Toyama prefecture)」

★○諏訪竜之介、伊藤拓生、岩田拓記、牧田直樹（信州大・理学部）「中央アルプス森林限界域における樹木細根の窒素吸収能：無機態および有機態窒素吸収に樹種間差はあるのか？」

○峯村友都（富山大院・理工学教育部）、和田直也（富山大・研究推進機構 GRASS）「立山高山帯に放置されたゴミの種類とその分布—潜在的な分布予測に向

けた種分布推定モデルの応用—」

(3) 優秀発表賞発表会（15:45～16:00）

厳正な審査の結果、以下の2名の学生に優秀発表賞が授与された。

諏訪竜之介（信州大）、小丸奏（岐阜大院）

近畿地区会

(1) 2023年 近畿地区会委員会

日時：2023年12月9日（土）

会場：琵琶湖博物館での対面とZoomによるオンラインのハイブリッド開催

【議題】

- 2022年度会計について、実績報告がなされ承認された。
- 2023年度会計について、現時点での実績報告がなされ承認された。
- 2024年度予算案について説明がなされ承認された。
- 次期事務局（2024-2025年）について提案がなされ承認された。  
地区会長：伊東 明（大阪公立大学）  
庶務幹事：吉川徹朗（大阪公立大学）  
会計幹事：奥野聖也（大阪公立大学）
- 大学院生より、近畿地区会での学生をメインとした研究発表会の提案がなされ、議論をした。開催方法・予算について、継続審議となった。

【報告】

- 地区会事務局より、地区会委員の退任・着任の報告がなされ承認された。
  - 2023年度近畿地区会 公募集会の決定と開催報告がなされた。
- (2) 2023年 近畿地区会総会および例会  
日時：2023年12月9日（土）  
会場：対面開催（琵琶湖博物館）

【総会】

2023年 近畿地区会委員会での審議・報告事項について、議長から報告が行われ承認された。

【例会】

以下の1件の基調講演と11件の口頭発表が実施された。質疑応答では、活発な議論がなされた。  
基調講演：西野 麻知子（元びわこ成蹊スポーツ大学教授、元琵琶湖環境科学研究センター総合解析部門長）「琵琶湖の生物研究は保全にどう役立たせられるのか—パーソナル・ヒストリーから」

口頭発表：

- 林息吹（京大・理）、東樹宏和（京大・生命）「多反復培養した環境細菌群集に現れる代替的状態の定量的理解」
- 中野崇平（神大・人間環境）、丑丸敦史（神大・人間環境）「オニタビラコ2亜種における都市-里山環境間での分布と種子散布能力の比較」
- 増田和俊（京大・人環）、瀬戸口浩彰（京大・人環）、長澤耕樹（京大・人環）、鈴木節子（森林総研）、久保田涉誠（株式会社ファスマック）、佐藤真（株式会社ファスマック）、永野惇（龍谷大・農、慶応大・

- IAB), 阪口翔太 (京大・人環)「海洋島で雌雄異株化したムラサキシキブ属の性決定ゲノミクス」
4. 島玄太 (京大・理), 東樹宏和 (京大・生命)「長期観測による淡水細菌群集動態の解析」
  5. 長野光希 (近大・院・農), 平岩将良 (近大・農), 早坂大亮 (近大・農)「温暖化由来の分布北上種が在来トンボの餌獲得能力におよぼす影響は生息緯度に応じて変わるのか？」
  6. 杉本廉 (神大・農), 東若菜 (神大・農)「大型地衣類カプトゴケ属リターの分解に本属の地衣成分と分解者群集が与える影響」
  7. 西野大輝 (滋賀県大・環境), 西田隆義 (滋賀県大・環境), 吉山浩平 (滋賀県大・環境)「二枚貝内におけるカイビルとタナゴ類の新しい寄生者間相互作用」
  8. 太田果南 (京大・農)「奥山に侵入する外来種ハクビシン〜芦生研究林への定着と繁殖〜」
  9. Bo-Moon Kim (CER, Kyoto University), Yamauchi Atsushi (CER, Kyoto University)「Dynamic resource allocation under the tragedy of the commons in plant」
  10. 小切壮仁 (神大・農), 東若菜 (神大・農), 黒田慶子 (神大・農)「アセビの通水阻害に対する通水回復機能の検討」
  11. 吉田風音 (近畿大・院・農), 平岩将良 (近畿大・農), 早坂大亮 (近畿大・農), 横井智之 (筑波大・生命環境)「殺虫剤ジノテフランに対するハキリバチ類の感受性への影響」
- (3) 2022年 公募集会の決定と開催

生態学の進歩と普及を図るために、近畿地区会員が主催する生態学会員および一般市民を対象とした生態学関連の集会をサポートするため、公募集会について2023年4月21日～5月26日まで募集を行った。応募は3件あり、地区会審査員で協議した結果、2件を採択とし、応募金額を配当した。採択状況は以下の通りである。

1. フィールドシンポジウム 能勢町の自然とレッドリスト (担当: 平井規央 / 関西自然保護機構)  
実施日: 2023年7月23日  
場所: 地黄湿地、冒険の森、淨るりシアター研修室
2. 海棲哺乳類調査実習 (担当: 三谷曜子 / 京都大学)  
実施日: 2023年8月23-25日  
場所: 和歌山県

## 中国四国地区会

- (1) 第66回中国四国地区大会 (2023年5月13, 14日, 於: オンライン, 徳島)

### 【口頭発表】

(5月13日)

「モロコシソウ *Lysimachia sikokiana* Miq. の生育状況」  
○小山克輝 (広島大・院・統合生命)・ファン=クイン=チ (広島大・院・統合生命)・内田真治 (広島大・技セ)・中原・坪田美保 (千葉県中央博・共同研究員)・坪田博美 (広島大・瀬戸内CN国際共同研究センター)

「アレロパシーに関する外来植物とバクテリア相の相互作用—ナンキンハゼを例に—」○盛沢鵬 (広島大・院・統合生命)・根平達夫 (広島大・院・統合生命)・和崎淳 (広島大・院・統合生命)・坪田博美 (広島大・瀬戸内CN国際共同研究センター)

「広島県のミナミメダカへのヒメダカによる遺伝子汚染状況評価」○佐多忠 (広島大・統合生命)・奥田ゆう (岡山理科大・獣医)・岡西政典 (修道大・人間環境)・奥田圭 (修道大・人間環境)・山田俊弘 (広島大・統合生命)

「環境DNAを用いた宍道湖・中海におけるニホンウナギの中・長期的モニタリングから見えてきたこと」  
○永田晃弘 (島根大院・自然)・山岸聖 (島根大院・自然)・辻井彩花 (島根大・生資)・稲岡悠樹 (島根大・生資)・高原輝彦 (島根大・生資)

「環境DNAメタバーコーディングを用いた島根県3地点 (美保関・恵曇・隠岐)における魚類相モニタリング」○坂本光織 (島根大・生資)・吉田真明 (島根大・隠岐)・笠根弘敏 (島根大・隠岐)・西崎政則 (島根大・隠岐)・高原輝彦 (島根大・生資)

「隠岐固有両生類オキタゴガエルとオキサンショウウオの遺伝的多様性と遺伝的集団構造の解明」○笹木快斗 (島根大院・自然科学)・井川武 (広島大・両生研セ)・山岸聖 (島根大院・自然科学)・高原輝彦 (島根大・生資)【優秀発表賞】

「山口県中部におけるヌートリアの頭部の雌雄差について」○飯田悠太 (山口大・創成科)・大森鑑能 (岐阜大・応動付属セ)・細井栄嗣 (山口大・創成科)

(5月14日)

「下層植生を伐採したヒノキ人工林における幹および葉生産の経年変化」○稲垣善之 (森林総研四国)・米田令仁 (森林総研四国)・宮本和樹 (森林総研)・酒井敦 (森林総研東北)

「発芽後の環境がブナ当年生実生の定着に与える影響」  
○多々納琴音 (岡山大院・環境生命)・松本哲也 (岡山大・環境生命 現: 茨城大・理)・Vu Khanh Linh (岡山大院・環境生命)・廣部宗 (岡山大・環境生命)・坂本圭児 (岡山大・環境生命)・宮崎祐子 (岡山大・環境生命)

「Adaptive Leaf Arrangements to Reduce Self-Shading within a Crown Newly Found in Japanese Monoaxial Trees」○青柳仁士 (広島大学・統合生命)・中林雅 (広島大学・統合生命)・山田俊弘 (広島大学・統合生命)【優秀発表賞】

「島根県の小規模な自然湿地における訪花昆虫群集と湿地性植物の花形質との関係」○渡津友博 (広島大・国際協力)・浜田旭中・平岩将良 (近畿大・農)・井上雅仁 (三瓶自然館)・三島秀夫 (三瓶自然館)・丑丸敦史 (神戸大・国際人間科学)・保坂哲朗 (広島大・先進理工)

「栄養卵の摂食によって変化するテントウムシ孵化幼虫の歩行メカニズム」○神田旭 (山口大学)・鈴木紀之 (高知大学)【優秀発表賞】

「死んだふりの緯度ライン：北の虫ほど高頻度に長く死んだふりを行う」○松村健太郎（岡山大・環境生命）・宮竹貴久（岡山大・環境生命）

「イワナの稚魚における実験水路内での表現型依存的な下流分散の個体群間比較」○山田寛之（愛媛大・理）・和田哲（北大・水産）【最優秀発表賞】

「マダコの個性と摂餌戦略の関係」○山田真悠子（島根大院・農生命）・小野廣記（島根大・生命）・吉田真明（島根大・生命）・佐藤成祥（東海大海洋）

「送信機を用いたヌートリアの行動解析」○渡辺伸一（リトルレオナルド／麻布大）・松本哲郎（山口県・農林総合）

#### 【高校生研究発表】（5月13-14日）

「アリ相調査による道後公園の自然林と造成林の環境評価」田中宏汰・三好啓太・大西悠貴（愛媛県立松山南高等学校）

「疾病媒介蚊感染症発生リスク評価のための基礎研究」二宮一輝・兵頭吹季（愛媛県立松山南高等学校）

「トキワバイカツジの保全に関する調査」濱見晴丘・小川健太・高田悠生（愛媛県立宇和島東高等学校）【優秀賞】

「海洋プラスチック分解への「ミルワーム」活用の可能性」合田陽洸・本多悠一郎・木綱康太・鬼嶋陽大（済美高等学校）【奨励賞】

「松山市の海岸におけるマイクロプラスチックによる環境汚染の実態調査」門田未来・廣江実采・蔵野美結（愛媛大学附属高等学校）

「海洋性細菌産生による生分解性プラスチックの経済的生産」村上陽向・近藤百々花（愛媛大学附属高等学校）【優秀賞】

「イネ科ヨシを用いた植物発電における根の量が発電量に与える影響」渡邊美樹（ノートルダム清心学園清心女子高等学校）

「風散布型種子の飛び方に迫る！」西田輝額・松本和樹（高知学芸高等学校）【最優秀賞】

「悪臭撲滅委員会～竹酢液によるアンモニアの消臭～」境啓汰・一倉来瞳・清水裕太・豊田和也・藤井美帆・山村華奈（山口県立下関西高等学校）

「いでよ神龍！仙豆で世界の飢餓をなくしたまえ！」相良実咲紀・徳永真佳・渡邊大輝・中本大和・西川莉緒・長谷川京香（山口県立下関西高等学校）

「微生物燃料電池の起電力を大きくする要素に関する研究」太田咲真・小畑香野・坂本晃輔・中山琉生・西本七海（鳥取県立鳥取東高等学校）

「ビオトープにおける環境条件の検証について」田中李果・田辺陽香・中原大翔・西垣友陽（鳥取県立鳥取東高等学校）

#### 【公開シンポジウム】（5月13日）

『ゲノム編集技術が切り拓く未来』

「趣旨説明」渡部裕（徳島大学教養教育院）

「進化するCRISPRテクノロジー—新規ゲノム編集ツールの開発とその利用—」刑部敬史（徳島大学大学院 社会産業理工学研究部）

「ゲノム編集による遺伝子改変ブタの作製」音井威重

（徳島大学バイオイノベーション研究所）

「食用コオロギの社会実装とゲノム編集による品種改良について」渡邊崇人（徳島大学バイオイノベーション研究所, (株) グリラス代表）

#### 【総会】（5月14日）

##### a. 報告事項

庶務報告

1) 学会誌発行部数、地区会員の動向（2022年12月末現在249名、昨年度から1名増）

2) 地区選出委員（地区代議員、自然保護委員）からの報告

3) 地域シンポジウム等補助金について

2023年度前期は「竹林景観ネットワーク第31回研究集会」を採択

4) 動物学会からの援助金減額（案）について

##### b. 審議事項

1) 2022年度会計決算案

・山本会計幹事から説明があり、承認された。

2) 2023年度会計予算案

・山本会計幹事から説明があり、承認された。

3) 次期会長の選出と次々期会長選挙の導入について  
事務局より下記の事項が提案され、承認された。

1. 役員会の承認により、次期会長は山田俊弘氏（広島大学）が就任する

2. 次々期会長選挙から選挙制度を導入する

4) 繰越金の活用法について：事務局より「失われゆく自然や社会-生態システムをテーマにした本・写真集の制作・出版助成」の提案があり、継続審議することとなった。

5) 2024, 2025年度合同支部大会開催地について、それぞれ岡山（2024年度）および愛媛（2025年度）が承認された。

#### 九州地区会

(1) 2022年度地区委員会・総会

2022年6月11日（土）佐賀大学

(2) 地区大会

第66回三学会九州支部・地区合同大会

会期：2022年6月11日（土）、12日（日）

会場佐賀大学

#### 【生態学会員による口頭発表】

○天野孝保（長大・院・水環）、山口典之（長大・院・水環）

「市街地-農村部の環境勾配におけるツバメの営巣地の比較」

○大槻恒介（長大・院・水環）

「耕作放棄水田を利用するヒクイナ個体の行動追跡の一事例」

○新宮仁大（佐大・農）、徳田誠（佐大・農）

「佐賀平野の異なる景観におけるカラス科3種の営巣特性」

○大塚陽香、陣内聡（佐大・農）井上健（佐大・農；山口大院・共獣）、徳田誠（佐大・農）

「佐賀県産カラス属における寄生蠕虫相の種間および

季節間比較」

○鈴木佑弥(九大院・システム生命)、立田晴記(九大院・理)

「日本産カラカラグモ科の分類学的状況および網構造の多様性」

○石津智史(九大・生態)、粕谷英一(九大・生態)、立田晴記(九大・生態)

「ヒメイトアメンボで見られる揺れ行動の解析」

○大脇隆聖(九大・生態)、粕谷英一(九大・生態)

「コオイムシの背負う卵数の増加による捕食者からの逃走頻度の上昇」

○細川貴弘(九大・理)、西村航(九大・シス生)、工藤慎一(鳴門教育大)、村上貴弘(九大・決断科学)

「エサキモンキツノカメムシにおけるメス親の卵塊防衛」

○佐々木麻衣、古川晶啓(佐大・農)、澤島拓夫、尾崎一天(近代・農)、Ayaman K. Elsayed、徳田誠(佐大・農)

「国内の土着きのこ類の菌糸体から確認された *Heteropezza* 属幼生生殖タマバエの同定および生態特性」

(3) 地区例会

第 588 回 6 月 25 日(土) 沖縄(オンライン開催、沖縄生物学会と共催)

緊急シンポジウム 沖縄島と座間味島における特定外来生物 グリーンアノールの現状を考える

第 589 回 7 月 16 日(土) 鹿児島(ハイブリッド開催) 佐藤正典(鹿児島大学名誉教授)・浜本麦(くすの木自然館)「鹿児島県始良市の思川におけるゴカイ科多毛類の分布と生殖遊泳」

第 590 回 11 月 6 日(日) 宮崎(宮崎大学農学部講義棟 L102 教室)

新村芳人(宮崎大学農学部獣医学科)「動物の化学感覚受容体遺伝子の進化」

西田伸(宮崎大学教育学部)「日向灘の鯨類/集団座礁個体の DNA 解析から迫る鯨類の社会構造の解明」

第 591 回 11 月 12 日(土) 佐賀(佐賀大学農学部 1 号館 2 階第 5 講義室)

奥園元晴(佐賀大学大学院農学研究科)「ヒメセスジハネカクシ属 2 種の生活環、行動、形態変異」

下村彩(佐賀大学農学部)「ミヤコグサ共生初期変異体 crinkle の機能解析」

吉田和広(佐賀大学農学部)「光合成の目で流水を見る: 人工海水生成装置を使った海水微細藻類の光合成応答研究」

第 592 回 11 月 12 日(土) 熊本(熊本大学理学部 3 号館 2 階 D201 号室)

吉野健児(環境省・国立水俣病総合研究センター)「現在の水俣湾生態系と生物への水銀蓄積」

古谷将彦(熊本大学・国際先端科学技術研究機構)「液-液相分離が担うオーキシン輸送制御機構」

竹田直樹(熊本大・生命資源研究・支援センター・疾患モデル)「雄性不妊モデルマウスと酸化ストレス」

第 593 回 12 月 10 日(土) 鹿児島(鹿児島大学理学部 220 号講義室)

【高校生の研究発表】

・鹿児島県立加治木高等学校 渡邊秀穂, 今村陽平, 丸岡武琉, 宇都功一郎, 乾聡真, 原田匠, 渋谷怜汰, 顧問: 山口武司「ヒマワリの東西とその利点」

・鹿児島県立錦江湾高等学校 本田康太, 中玉利青, 中村結花, 岡田紗季, 水田菜乃, 町田結日那, 中山滉晴, 清水禪, 顧問: 小溝克己「探せ! カブトムシの種を分ける境界線」

・鹿児島県立錦江湾高等学校 野元颯真, 内村療人, 瀬戸山凌汰, 塩入晴陽, 大川畑星成, 味園桃花, 浅井雄貴, 有川颯一, 吉屋侑真, 顧問: 大迫武治「なぜ、ギンボシザトウムシはクモの巣に引っかかるのか?」

【一般講演】

渡部俊太郎(鹿児島大学理学部)「植物の多様性はどのように維持されているのか: 種内と種間の視点から考える」

第 594 回 12 月 10 日(土) 長崎(長崎大学環境科学部本館 1 階 大会議室)

○田中章吾, 小野友梨夏, 八木光晴(長崎大院・水環)「深海性等脚類オオグソクムシの代謝速度は代謝スケールリング則から外れるのか?」

○金 希美, 岡田二郎(長崎大・環境)「チゴガニの各種行動と心拍の関係」

○窪田理沙, 桑野和可(長崎大・水環総合)「ヒジキの卵からの室内種苗生産について」

○井上翼, 谷口隼也(長崎大・院・水・環), 黄 榮富(国立高雄科技大学), 水元惟暁(OIST), 平井厚志(すさみ町立エビとカニの水族館), 竹下文雄(北九州市立自然史・歴史博物館), 佐藤武宏(神奈川県立生命の星・地球博物館), 河端雄毅(長崎大・院・水・環)「カニ類における進行方向と形態の関係性の解明」

○川西 翔, 菅向志郎, 竹垣 毅(長崎大・院水環)「ロウソクギンポの雄はなぜ干出する巢で卵保護するのか?」

○小野友梨夏(長崎大・水産), 平坂勝也(長崎大・水産), 明正大純(静岡県立大・食品栄養科学), 藤本真悟(琉球大・熱帯生物圏研究センター), 八木光晴(長崎大・水産)「ニホンウナギの環境 DNA 濃度と生息環境の関係」

大概恒介(長崎大学・院・水環)「繁殖期に耕作放棄水田を利用するヒクイナの行動圏」

○天野孝保(長崎大・院・水環), 山口典之(長崎大・院・水環)

「都市一農村間の環境勾配におけるツバメの営巣地選択と最適環境の評価」

第 595 回 12 月 10 日(土) 福岡(九州大学理学部ビュッテリーフ 202 号室)

佐々木江理子(九州大学大学院理学研究院)「植物のエピジェネティクス制御を介したゲノム多様性獲得

メカニズムの探索」

熱田勇士（九州大学大学院理学研究院）「再現しようとする試みから四肢発生を理解する」

吉村友里（九州大学大学院理学研究院）「捕食者への警告シグナル「警告臭」—ツチガエルのニオイの事例から—」

第 596 回 12 月 17 日（土）大分 → 新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

(4) 地区会報 82、83 号発行

## 書 評

源利文著 (2022) 「環境 DNA 入門」120pp. ISBN:978-4000297158 岩波科学ライブラリー 1,320 円 (税込み)

全体を貫く疾走感と臨場感に導かれ、一気に読了。コンパクトながら、環境 DNA の何たるか、環境 DNA 技術の成立から説き起こし、この技術の活用の現状と未来を語る。

元来「環境 DNA 分析技術」は微生物を単離することなく、その分布を調べようとする目的で開発されたものであり、体外 DNA 探索をターゲットにしたものではなかったという。ところが、著者がコイヘルペスウイルスの研究から見いだしたように、環境へこぼれだしても、速やかに分解されてしまうと思われていた DNA が、実は大量に環境中に漂っていることをが明らかになっていく。「琵琶湖の水を汲むだけで住んでいる魚がわかったら」という当時の同僚との会話がきっかけで、いよいよ、現在の用法でいう「環境 DNA 技術」が始まっていく。何ともわくわくする会話。

世界初を夢見るも、フランスチームに先を越されたことに気づくくんだり、評者はアカデミズムの住人ではないが、その心情察して余りある。非専門家の読者に向け、研究の世界における新規性の重みをアピールする。とはいえ、転んでもただでは起きない。ターゲット種をしぼった同定で先行されたなら、そこは発想の転換。「そこに何が棲んでいるのか」を調べ上げる研究へと方向性を変えて前進する。めげない、へこたれない、満を持して最高の発表（2011 年日本生態学会札幌大会）をしたつもりなのに、誰も反応してくれず愕然、呆然、落胆ご本人が「強烈すぎて忘れられそうにない」というシーンも、先を行き過ぎていて、皆がついてこないという、科学史上ままみられるパイオニアゆえの悲喜劇エピソードのひとつであろう。

種特異的解析と網羅的解析に分けてこの技術の進歩、今後の課題について語られる。前者では外来種 / 在来種問題に関して、目視等にたよるぬ目的種の検出が可能であることを立証し、その実力を示している。後者については「DNA バーコード」の概念、「DNA メタバーコーディング」の実際が、琵琶湖をフィールドとする調査や全国一斉魚分布調査などの実例を見せながら紹介される。ちなみに、日本酒造りのプロは、仕込み季節には納豆やヨーグルトの摂取を控えるという話を伺ったことが

あるが、魚類環境 DNA メタバーコーディング研究の際、コンタミネーション防止のため、新鮮な魚介料理の本場に赴きながら、魚食だって控えるのがこの分野に生きる実験者の「心意気である」とか。なんとも涙ぐましいプロ意識。

このような調査においては、専門家でなくても行える現場作業が可能。市民科学的調査、環境教育への応用が期待でき（p90）、中等教育に携わる評者のような者にとって非常に興味を惹かれるところである。

2011 年の学会発表では見向きもされなかった研究 / 技術が、今では国や地方自治体による生物モニタリングや環境アセスメントに利用されるなど、急速な発展と社会への浸透が進行中（p107）である。今後の展望として、エビジェネティック研究の知見と関連付けて個体群まるごとの年齢構成把握や、患者が排泄する病原体由来の環境 DNA/RNA 分析から感染症サーベイランスなど未来への構想も語られ、この技術の持つポテンシャルを改めて認識させてもらえる。マクロ生物学（生態学）とミクロ生物学（分子生物学）のギャップを埋める（p104）この手法はラボ（インドア）研究とフィールド（アウトドア）研究の有機的な融合であり、著者のいうように、総合的生物学の発展に大きな寄与をすることが期待できる。

失敗も成功のもと、先を越されたこともあったけれど、先頭ランナーとしての矜持をもって研究に邁進する姿、苦闘と楽しさがしっかりと伝わってくる。一緒に走ってともに一喜一憂しているような心持にさせてもらえる。非専門家の読者には、DNA という近寄りかたそうな存在が、身の回りの自然環境を見つめることと結びつくという面白さを、中等教育現場の読者には良質な授業ネタを届けてもらえる魅力的な好著。

(愛知県立松蔭高校教諭(生物担当) 高橋伸行)

宮下直著 (2023) 「ソバとシジミチヨウ 人 - 自然 - 生物の多様なつながり」248pp. ISBN:978-4-87502-557-3 工作舎 価格 2600 円 + 税

愛らしいソバの花とミヤマシジミの表紙に惹かれ手をのばし、ひとたび開くと、人と自然の関わり方が多方面から考察され、環境問題、SDGs と私達が直面している課題について取り上げられているのが分かる。こういふと、かしこまった本かと思われるかもしれないが、堅苦しさはなく、次々と展開される話には惹かれ、一気に読み終えてしまった。

4 章だての第 1 章「人と自然の歴史」では、ヒトという生物種の進化的な背景に始まり、歴史的、社会的な側面などから、ヒトは自然とどのようにつきあってきたのか、その付き合い方は、時代とともにどのような変遷を遂げたのかが非常に説得力を持って紹介されている。本書のキーワードとなる「脱自然」と「親自然」について説明されるこの章から、ごく自然な流れで、様々な研究が紹介される次章へと続く。

第 2 章「里山の多様な生物」では、房総のシカ問題や、下総台地のジャノメチヨウの生息地のネットワークなど、著者がこれまで取り組んできた研究が、背景や裏

話とともに綴られている。この章も前章に続き、次々に読みたくなる面白さがある。また、研究の魅力や生態学の意義がひしひしと伝わってくる章でもある。この点からだけでも、生態学の研究者だけでなく、未来を担う子どもたちや、これから研究者を目指す若者、異分野の研究者にも推薦したくなる。

第3章「ソバとシジミチョウ」では、本書のタイトルにある多種多様な昆虫により実りがもたらされるソバと、絶滅危惧種IB類に指定されるミヤマシジミの研究が十分に紹介されている。そこでは、大学院生達が調査している地域に溶け込み、じっくりと確実に研究成果を挙げ、個人の研究として、また、チーム一丸となった研究として、面白さを増していく様が伝わってくる。この章は、保全活動を行う際の指南書になるだけでなく、職種にかかわらず何かしらのプロジェクトを進める上でも参考になるだろう。

締めとなる第4章「人と自然のリアルな関係」では、1章で提起された「脱自然化」がもたらした影響に始まり、2-3章での「親自然」の視点から行われた、多様な生物の研究から分かってきたことなどを踏まえ、「人と自然の適度な関わりを取り戻すこと」を提唱している。

いま故郷の調査地からの帰りの、きのくに線の電車内にてこの書評を書いている。幼少期から幾度となく眺めた車窓に映る里山の風景には、土地利用の変化に伴うアンダーユースの影、野生動物の急激な変化、外来種の繁茂などが次々と目に飛び込んでくる。昨日は故郷の調査地の近くで、私の幼少期には、故郷ではまだ比較的珍しかった南方系のウスイロコノモノチョウの幼虫を見かけた。どうやら最近ではよく見かけるらしい。まだ半世紀も生きてはいないが、体感としても急速な速さで変化が起こっている。これから私達ヒトを含む、多種多様な生物はどうなっていくのだろうか？

本書を通したキーワードとなる、ヒトが昔からごく自然に環境と付き合ってきた「親自然」と、近年急速に進んでいる「脱自然」。SDGsを掲げた研究や、「自然との共生」を謳った取り組みの中にも、「脱自然」の潮流を推進するものも少なくないように感じる。「脱自然」化に伴い、生活が便利になり、科学技術が進歩したもの確かではあるが、私達は自然の中の一つにすぎないヒトである以上、「脱自然」をこのまま押し進めるのに無理があるのもまた自明である。環境問題に直面する現在において、「親自然」と「脱自然化」、この真逆ともいえる二つの思想の折り合いを今後どのように見つけていくのか？ 私達は今どこに向かっているのか？を今一度考えさせられる1冊となっている。

本書「ソバとシジミチョウ」は、立場や状況などにより、感じられるものが違う面白さもあるように思う。読後、各人が何か大切なものに出会える本ではないだろうか。広く推薦したくなるだけでなく、私自身もソバに置き、何度も読み返したい一冊である。

(神戸大学理学研究科生物学専攻 辻かおる)

高橋純一著 (2023) 「ミツバチの秘密」 352pp. ISBN:978-4-89531-895-2 緑書房 定価 2,800 円+税

ハチと聞いてあなたは何を思い浮かべるだろうか？黄色と黒の縞模様の刺す危ない虫を想像するかもしれない。日常的に出会うと反射的に避けてしまう人も少なくはないだろう。一方、ミツバチではハチミツやローヤルゼリー、プロポリスなど養蜂産物を生産する家畜昆虫、益虫としての側面もあり、人類と深い関わりのある昆虫と言えよう。生物学的には、アリと同様の高度な社会性を持ち社会生物学の発展に貢献してきた存在でもある。本書はミツバチの分類、生態、生理、行動、生活史、病気、外来種問題、養蜂生産物そして環境教育まで、手広く取り扱った専門書である。「ミツバチの秘密」という柔らかな本のタイトルではあるが、中身は広く深く、「ミツバチの生物学」という硬派なタイトルがつけられてもよいくらいである。

序章ではミツバチについてのよくある一般的な質問についてのQ&Aで、それぞれの疑問に対する詳細な解説がイラストや写真付きで読めるようになっている。第一章では世界のミツバチの紹介で単に種の紹介だけにとどまらず、検索表もついているので(日本のミツバチ類ではあまり使うことはないと思われるが)、国外の種を含めてミツバチの各種の分布や系統関係を知ることができる。第二章ではミツバチの体の基本的な構造が紹介され、神経系やミツバチに特異的な針の構造、花粉かご(後脚にある花粉を集める部位)などについても紹介されている。第三章ではミツバチの行動や習性について述べられていて、生活史やフェロモンの役割、結婚飛行、巣の構造などを知ることができる。第四章ではDNA解析を用いた繁殖生態や特殊能力についてまとめられている。著者が得意とするDNA解析手法の解説から、実際の調査から得られた交尾回数の推定や種間交雑に関する知見、さらにミツバチの認知能力や学習能力が紹介されている。第五章はミツバチからの恵みについての章で、ハチミツの種類や、成分、効能をはじめとして、ローヤルゼリー、プロポリス、ミツロウ・蜂ろう、ハチの子、蜂針療法、ポリネーション(花粉交配)について知ることができる。第六章ではミツバチの害虫や天敵について取り上げられている。ウィルスや細菌、ダニなどが引き起こす病気、スズメバチや哺乳類などの天敵について解説されている。第七章では著者自身のフィールドワークの様子や思い出がつつられており、臨場感もあり、この章は他の章とは一線を画す印象である。最後に、第八章はミツバチとヒトとの関係についての章で、養蜂のほかにも生物多様性の損失や環境問題とミツバチの減少についての話題、そしてミツバチを通じて環境問題に目を向ける教育的価値について紹介されている。今後の展望に期待したい。

本書はハチにちなんで、章の数や各章の見出しの数まで8つ(ハチ)に統一されており、著者のこだわりが見てとれる。またコラム・ミツバチ博士のちょっとためになる話が8つ盛り込まれていて、専門的な内容の解説もされているので、本書を読むうえで助けとなる。さらに、

本書の大きな特徴として、解説動画を利用できる点が挙げられる。ひと昔の本なら付属資料としてCDが添付されていていそうではあるが、本書ではQRコードが随所にあり、著書が作成したYouTubeサイトに案内される仕組みになっている。本書を読む際にはスマートフォンやタブレットを片手に置いてご一読いただきたい。

私はミツバチではない昆虫を材料に研究を行っているが、ミツバチでは分類から養蜂に至るまでたくさんの知見が蓄積され、こんなことまでわかっているのか、と改めて驚かされた。本書をきっかけにハチについて、一つ一つの話を探掘りするきっかけにもなるだろう。私は大学学部時代に「養蜂学」という講義を履修したことがある。ミツバチの基本的な生態、分類、養蜂に関する内容であったと記憶している。一番印象に残っているのは、5月下旬に行われていた採蜜実習であり、ミツバチが集めたはちみつをありがたくいただいたことは今でも覚えている。もしあなたが養蜂学の履修者なら、本書を養蜂学の教科書として手元においていただきたい。もちろん、ミツバチの生態に興味がある方や中高生、大学院生やアマからプロの養蜂家にとってもバイブルとなるに違いない。

(長崎大学人文社会科学域 大庭伸也)

柳川久監修 塚田英晴・園田陽一編 (2023)「野生動物のロードキル」340pp. ISBN:978-4-13-060246-4 東京大学出版会 本体 5,500 円+税

田舎や山地を運転している時に轢かれた動物の死体を見たことがある人は多いだろう。中には実際に轢いてしまった方もいるかもしれない。ちなみに私は一度カラスとフクロウを轢いた事はあるが哺乳類はまだ轢いたことがない。このような道路上で起こる動物の事故死はロードキルと呼ばれ、毎年多くの野生動物が犠牲になっている。ロードキルは人間サイドにも経済コストや心理的負担といった不利益をもたらすため、野生動物と人間の軋轢問題の主要課題である。本書はロードキルに関する日本で初の学術書である。なお本書はロードキル研究が進んでいる哺乳類を対象にしている。本書は、ロードキルの歴史や動物への悪影響をまとめた総論としての第1部(1～2章)、ロードキルに遭う哺乳類種それぞれについて解説した第2部(3～12章)、ロードキルを減らすための対策や今後の課題や展望をまとめた第3部(13～終章)からなる。

第1章では、ロードキル問題の歴史が説明される。日本では、1990年代に建設省によって進められたエコロード事業において、配慮すべき悪影響としてロードキルが注目された。一方アメリカでは、1970年代から野生動物管理の課題としてロードキル問題が注目され、連続性確保と安全な交通の両立を目指す道路デザインの議論が進められた。野生動物管理の課題として扱われたアメリカと違い、日本では環境工学の課題としてロードキルが認識されたという点が興味深かった。第2章は、ロードキルを含む道路全般の野生動物への影響の総説であ

り、道路生態学のコンセプトが分かりやすく解説されている。ロードキルは道路が個体群にもたらす直接的影響の1つであり、道路の影響全般は生息地の縮小やエッジ効果、分断化のように複合的であり、それぞれの相対的重要性は時間スケールで変わることが説明される。本章は、ロードキルをあくまで1つの要因として扱うことで、道路と野生動物の関係性全般の理解を目指した道路生態学への橋渡しの役割を担っている。

3～12章は各論であり、エゾシカやタヌキといったロードキル件数が多い種から、飛翔性哺乳類(ヤマネ・モモンガ)、ヤマネコのような希少種まで幅広く解説される。各章の内容は著者に委ねられており、研究者はロードキルの原因と実態の解説、保全実践者(環境省やNPO職員)はオーバーパスの設置など事業紹介が中心であった。研究についてはロードキルの発生季節や地点からその原因を推察するというアプローチがほとんどであった。12章だけが異なるアプローチであり、遺伝学的手法によって道路建設が野ネズミの遺伝的分化を引き起こしたことを示唆する。この方法は、道路造成が個体群の分断化を引き起こすのかを調べる上で強力であり、他種や他地域でも応用可能である。

13章と16章では国内外のデータベース構築の現状と課題について説明される。かつては行政主体であったが、最近はアプリを使ったロードキルのモニタリングが一部地域で試行されており、今後は全国規模の市民科学によるデータ蓄積が期待される。14章は人獣共通感染症のリスクとしてのロードキルについて解説される。15章では、ロードキル防止のための進入防止柵の種類の多さに驚かされた。17章はロードキル問題を野生動物管理の枠組みで捉え、生物学と社会学の統合的アプローチで取り組む必要性を訴えている。1章で述べられた通り、日本のロードキル問題はエコロード事業にルーツを持つため、野生動物管理の課題として扱う動きが欧米より弱かったのだろう。終章では、ネイチャーポジティブを目指したロードキル対策、道路生態学の展望が議論される。道路や植林地のような自然環境に食い込んだ人為生息地は、生物多様性に配慮した設計が求められる始めている。保全生物学の最重要トピックとの関連性を説明することで、ロードキル研究や道路生態学の今後の重要性を強調し、本書は締め括られる。

本書全体の優れた点は章構成のバランスの良さが挙げられる。これは後書きに書かれている通り、編者2名の専門分野が野生動物管理学と景観生態学と異なるためだろう。また、「侵入」という漢字の悪いイメージを避けるためにあえて「進入」という表現を使った点は、不慮の事故で死んでいった野生動物へのリスペクトが感じられた。動物が道路に進入しているわけではなく、道路が生息地に侵入しているのだから。一点だけ物足りなかった点は、「野生動物はなぜ道路に進入するのか?」という章がなかったことである。個人的には動物行動研究の保全や管理への応用に興味があるため、行動学的視点からの原因の考察があれば面白かったと思う。第2部で出没原因が種ごとに説明されているが、総合的な枠組みの説明があれば、より良かっただろう。ただしそれを差

し引いても、本書は野生動物管理や道路生態学に興味のある研究者・学生に強くおすすめできる良書である。

(高知大学 富田幹次)

**平林公明、東城幸治著 (2024)「河川生態学入門：基礎から生物生産まで」252pp. ISBN:978-4320058415  
共立出版 本体 2,700 円+税**

最初に本書を手にとった際、「ん？」と気が付きました。英語のタイトルが「Introduction to River Ecology」と、「河川」を「River」としているのです。この理由は、「まえがき」に述べられています。従来、日本における河川生態学の教科書や入門書の多くは、河川上流域や、比較的規模が小さい河川を対象とするものでした。もちろん、本書でも河川上流域・小河川の記述もあるのですが、本書で特に目を引くのは河川中流域に関する記述です。著者らは、河川中流域こそ人々が最も接する機会が多く、河川中流域が抱える課題として「陸域と水域の生態系機能と構造が多くの要因によって影響を受け、時間的にも、空間的にも複雑に相互に関連性をもっている。そのため解析が難しく、研究対象地域としてはこれまであまり取り上げられてこなかった。」と述べています。この点が、まさに本書のユニークさの第一点でしょう。そして、本書を読んだ方々は、著者らおよび千曲川研究グループが、特に集中して生物生産研究に取り組んだ6年間を含む、25年以上にわたる千曲川における河川生態学研究の総決算に触れる機会に恵まれます。

本書は、大きく2部構成となっており、第1部では日本の河川環境・生態系を概観しています。とは言っても、ところどころに配置された「コラム」では、キーとなる項目や事象をかなり深掘りして解説しており、これらは河川生態学の初心者のみならず、平素から河川生態学に良く接している方々にとっても、とても勉強になるのではないのでしょうか。第1部には、水文学や水理学にもかなりの紙面が割かれており、これは河川の生態を研究するには学際的な取り組みが必須であること、および本書が国土交通省千曲川河川事務所との協働によるものであることからもうかがえます。

そして第2部は、いよいよ河川中流域を対象とした生物生産の記述となります。研究の中心となっている千曲川研究グループは、1995年の発足以来、継続して本川の生態学研究に取り組んでおり、その過程で2015年から2020年までの6年間にわたる「生物生産に関わる総合調査・研究」が行われました。本書は、多くの研究者(本書の著者数だと、15名)が千曲川中流域の特定地域に6年間集中して取り組んだ生物生産研究の総決算なのです。それだけに、本書第2部の記述には、細菌生産やバイオフィーム動態などの微生物から水生昆虫、魚類そして鳥類まで、「千曲川中流域の生物生産について、とことん調べつくす！」との迫力が感じられます。さらには、生物生産に加え、水生昆虫の遺伝構造の章も設けてあり、最新の研究成果へのアップデートもなされています。

私が、本書において特に印象に残ったのは、千曲川研

究グループは確実に前進していることが本書から読み取れたことです。以前、当該グループは沖野外輝夫先生に率いられ、千曲川中流域における炭素の物質収支を明らかにして、その成果は2001年に発表されました。沖野先生を引き継いだ現在の千曲川研究グループは、最新の科学と技術を駆使し、沖野先生の時代には未解明であった炭素収支を明らかにして、千曲川の炭素収支に加えたのです(174から176ページ)。このことは、素晴らしい学問の継承であり、人材育成の成果といえます。

たいいていの科学の教科書では、最終章などを使って「〇〇学の新たな展開に向けて」や、「今後の〇〇学とわたしたち」のような記述を行い、将来展望のような議論がなされます。それに対して、本書ではそのような記述がほぼ無く(180ページに、半ページほどの記述があるのみ)、ほとんどすべてにおいて「研究」が議論されています。著者らの潔さが、この点に表れています。

先述では、私は本書を評して「千曲川中流域の特定地域に6年間集中して取り組んだ生物生産研究の総決算」と述べました。ですが、千曲川での河川生態学研究は現在も継続中であり、この意味では「総決算」というよりは、「大変優れた中間報告」なのでしょう。それにしても、この内容で「入門」なのですね。河川生態学の「門」をくぐるには、なかなか気合いが必要です。つまり、それだけ本書は読みごたえがあるのです。私は、曲がりなりにも、大学院生時代から数えて30年以上にわたって水圏生態学や陸水学の研究に携わってきました。が、その私でもページをめくるごとに新しい知識が得られるのです。本書は、河川生態学にちょっと興味があるという方々よりは、これから卒論や修論で河川生態学を研究テーマにしたい方々、さらにはすでに河川生態学をご専門とされて仕事をされておられる方々に、まさに恰好の書です。河川生態学について、ちょっと「ハイレベルな入門」を試してみたい方々に、私は本書について自信をもってお薦めします。

(京大大学生態学研究センター 中野伸一)



京都大学  
生態学研究センター

Center for Ecological Research  
Kyoto University

京都大学生態学研究センター  
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3  
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201  
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University  
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,  
520-2113, Japan  
Home page: <https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2024年  
1月号

## 京都大学生態学研究センターニュース 掲載内容のご紹介

「研究ハイライト」では、  
プレスリリースされ京都大学ホーム  
ページ等で掲載された研究成果  
を紹介しています。

- センター員の紹介
- センターを去るにあたって
- 2023年度共同利用・共同研究事業の活動報告
- 研究ハイライト
- その他のお知らせ

### センターニュース メール配信登録のお願い

生態学研究センターニュースは  
バックナンバーを含め、センター  
ホームページの以下の URL からご  
覧いただけます。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/newsletter.html#ct3>

発行のお知らせメール配信の登  
録、配信先の変更、配信停止等  
ご希望の場合は、インターネット  
上の以下のフォームより必要事項  
のご入力をお願いいたします。

<https://ws.formzu.net/fgen/S75832635/>



01

DIWPA 共同研究: タイ低地熱帯季節林の異  
なった森林タイプに生育する樹木葉の生理生  
態特性-データを利用可能な形にオープンし  
ました-

DOI: 10.1038/s41597-023-02468-6.

.....石田 厚  
京都大学生態学研究センター・教授

03

20年間の森林とニホンザルの個体数の変動:  
934人の「ヤクザル調査隊」による成果

DOI: 10.1016/j.foreco.2023.121306

.....半谷 吾郎  
京都大学生態学研究センター・准教授

02

地上と地下の生態系をつなぐ「コア生物種」  
—DNAメタバーコーディングで見えてきた食  
物網の季節動態—

DOI: 10.1038/s41559-023-02130-9

.....鈴木 紗也華  
2023年3月まで京都大学大学院理学研究科  
(生態学研究センター)・博士後期課程在籍

04

行動操作のツールは宿主から!?:  
カマキリからハリガネムシへの大規模遺伝子  
水平伝播の可能性

DOI: 10.1016/j.cub.2023.09.052

.....佐藤 拓哉  
京都大学生態学研究センター・准教授

### 2024年度共同研究bの申請について

毎年度、生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究と研究会・ワークショップを公募  
しております。

2023年度より共同研究b (随時募集、予算措置なし)がGoogle フォームでの申請に変更となりました。

申請方法の詳細はセンターホームページの以下の URL をご確認ください。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/contents.html>

問い合わせ先  
京都大学生態学研究センター 共同利用・共同研究拠点担当  
電子メール: [kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp](mailto:kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp)  
電話: 077-549-8200

## ◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

## 会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員（一般）	9500円	○	○
正会員（学生）	4500円	○	○
賛助会員	年会費 20000円／22000円	×	×

\*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。  
詳細はウェブサイトをご覧ください。

## 【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 投稿権利は会員に限定されません
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

## 【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- ・Ecological Research 8,000円
- ・日本生態学会誌 2,000円
- ・保全生態学研究 2,000円

## 【非会員に向けた学会誌(冊子体)定期購読料】

- ・日本生態学会誌 5,000円
- ・保全生態学研究 5,000円

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@as.bunken.co.jp

Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631